平成６年度長久手町郷土資料室特別展

長久手の旧道と道しるべ

愛知県長久手町教育委員会

82

平成６年度長久手町郷土資料室特別展

長久手の旧道と道しるべ

愛知県長久手町教育委員会

目　　次

ことわりがき

あ い さ つ

長久手の道標写真 …… 1

Ⅰ　長久手の旧道 …… 4

踏みわけ道、名古屋城下と結ぶ道、信州飯田街道、

長久手の脇街道

Ⅱ　長久手の道しるべ …… 5

道標の区分と形状、道標の現況

Ⅲ　長久手の旧道を歩く …… 6

三州道、八草道、山口道、岩作道、瀬戸・鳴海道、

長湫道

Ⅳ　都市化と旧道の消滅 …… 10

交通路の変化、旧道の消滅と保存

参　考　文　献 …… 11

道標の所在地、形状一覧表 …… 12

旧道、道標地図 …… 13

ことわりがき

1. 本書は、長久手町郷土資料室特別展「長久手の旧道と道しるべ」の展示内容を紹介するものである。
2. 本書の構成は、ほぼ展示内容に則して組まれているが、レイアウト等の都合上、一部変更した部分がある。

あ　い　さ　つ

特別展「長久手の旧道と道しるべ」

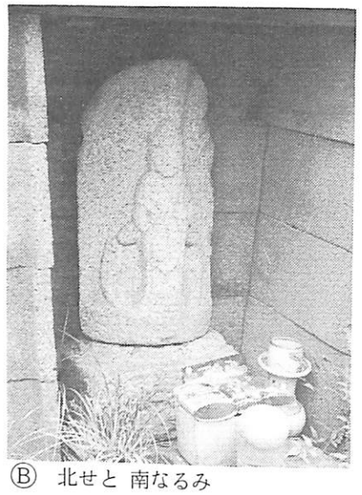
本町には数多くの道しるべが、あちこちに点在し、過去から現在・未来へと、歴史の語り部として受け継いできました。

そこで、今回の特別展は、開発化、道路改修などによって移動を余儀なくされ、忘れされようとしている、これらの貴重な文化遺産等を展示し、「長久手の旧道と道しるべ」を多くの方々に知っていただこうと企画しました。

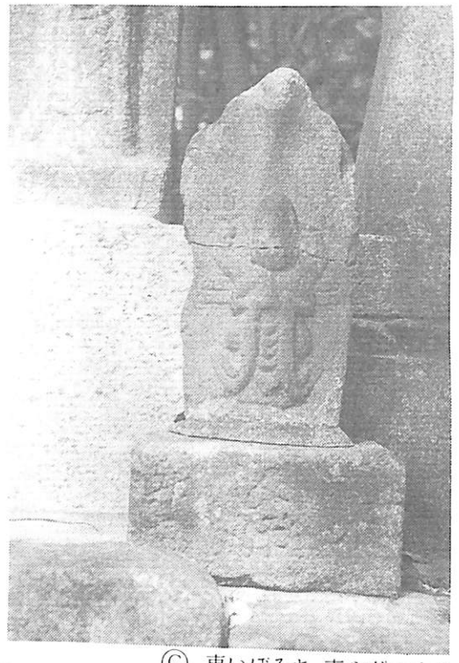
平成６年１０月

長久手町教育委員会

教育長　浅　井　静　男

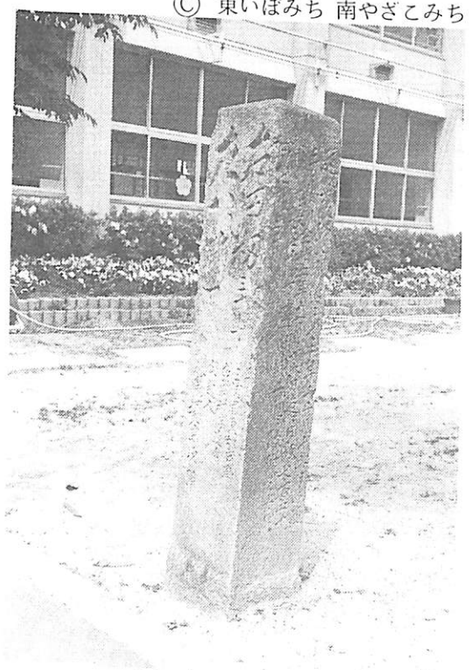


Ⓑ 北せと 南なるみ

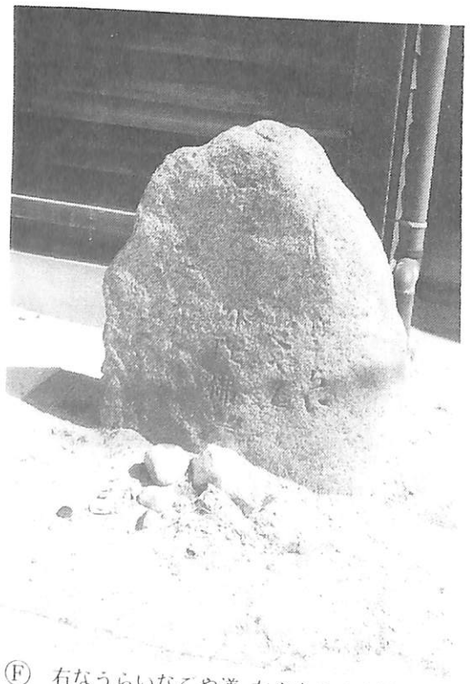


Ⓒ 東いぼみち 南やざこみち

Ⓓ 右あきはあすけ道 左さなげ道



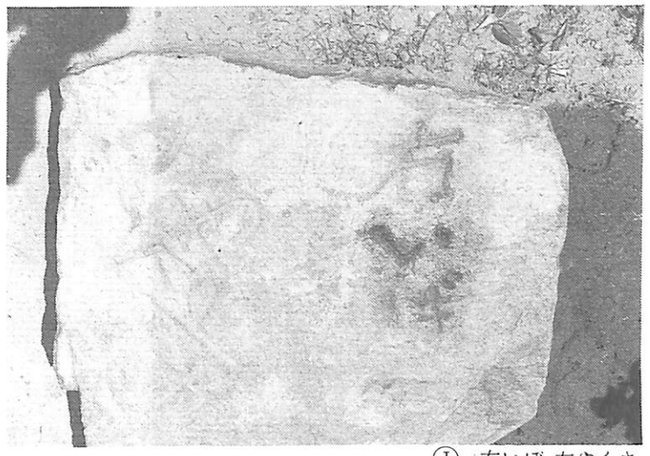
Ⓖ 右田籾三十四丁 左八艸一リ



Ⓕ 右なうらいなこや道 左やさこミや道

Ⓗ 右いハさきふくた

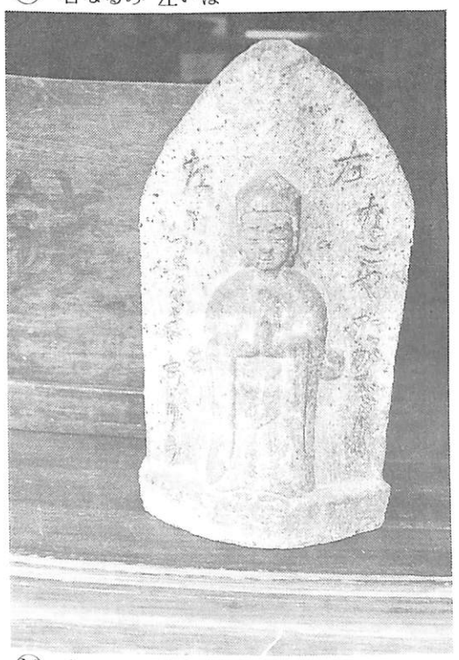
Ⓘ 右福田 ちりう新四国弘法道 左伊保豊川道



Ⓙ 右いぼ 左やくさ

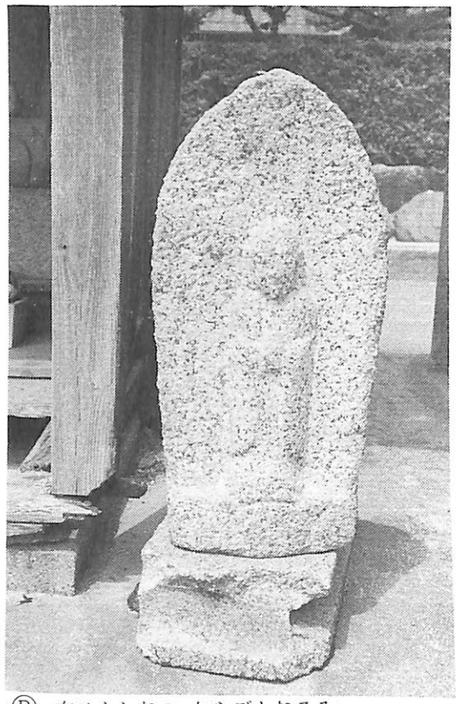
Ⓚ 右なるみ 左いぼ

Ⓛ 右なごや道 左なるみ道



Ⓜ 右なごやたかはり 左いわさきちりう

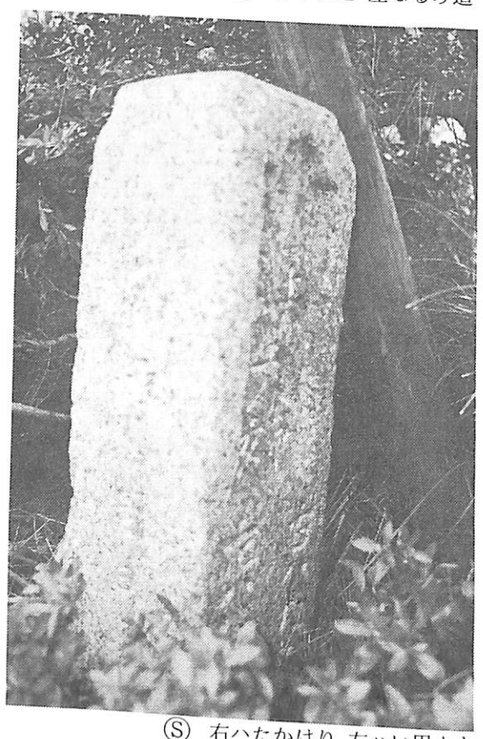
Ⓝ 右三州道 左品野水野道



Ⓟ 右せとしなの 左やごとなるみ

Ⓠ 右せと道 左なるみ道

Ⓡ 右長久手 左岩崎新田道



Ⓢ 右ハたかはり 左ハい巴さき

長久手の旧道と道しるべ

Ⅰ　長久手の旧道

踏みわけ道

長久手町内には弥生式土器などが発見され、各所に古墳や古窯跡があります。岩作の石作神社や長湫の景行天皇社は、平安時代の創建と伝えられ、古くから人々が住んでいたことは確かです。しかし江戸時代より以前は、この地域の村の形態を正確に伝える史料がなく、その実態はほとんどわかっていません。人口が少なかった当時は、道路といっても住居と田畑、あるいは隣村との連絡路も、自然発生的な踏みわけ道と大差ないものだったと思われます。

天正１２年（１５８４）の小牧・長久手の合戦は、この地域で起きた歴史的な大事件でした。現在の長久手町域を通って岡崎を目ざした池田軍や、それを追って来た徳川軍も、軍勢を進めた道路は、やはりそのような踏みわけ道だったのでしょう。しかし当時すでに村と村とをつなぐ間道が各地に通じていたことがわかります。

名古屋城下と結ぶ道

江戸時代になって、名古屋に巨大な城郭と城下町が建設されました。藩政が確立されるとともに、年貢米の運搬や生活物資の供給などのために、名古屋へ向かう道路が整備されました。

尾張の東端に位置する現長久手町域の村々の人たちは、猪子石村を通って香流川沿いに名古屋へ向かいました。この道は地形が平坦で起伏が少ないので、名古屋へ向かうにはもっとも便利だったのです。それに対して長湫から上社村を経て末森村へ向かう道は、急坂が多くて、いくつもの峠を越さなければならないので、ほとんど利用されませんでした。

信州飯田街道

江戸時代の中期になると、商品経済の発達にともなって、馬や牛の背による物資の移動が盛んになってきました。とくに信州飯田方面から三河山間部を通って、名古屋や岡崎などに大量の荷が運ばれました。これを信州では「中馬（ちゅうま）」と呼び、三河や尾張では「馬かせぎ」と呼びました。中馬は「賃馬（ちんま）」という意味もあって、山間の農民の駄賃かせぎとして発生したものが、その規模が大きくなりました。１人の馬方が引く馬の数も、はじめは１頭でしたが、幕末には４頭ほどになり、１頭の馬には約３０貫の荷物が積まれたので、４頭の場合、馬方１人で１２０貫（約４４０kg）の荷物を動かしていたことになります。信州からはタバコや木地椀などが運ばれ、帰路には塩や干魚、茶や綿、瀬戸物などを積んで行きました。

かれらが通過するおもだった道筋は図１のように分かれていました。現町域では、三ケ峯峠から前熊、

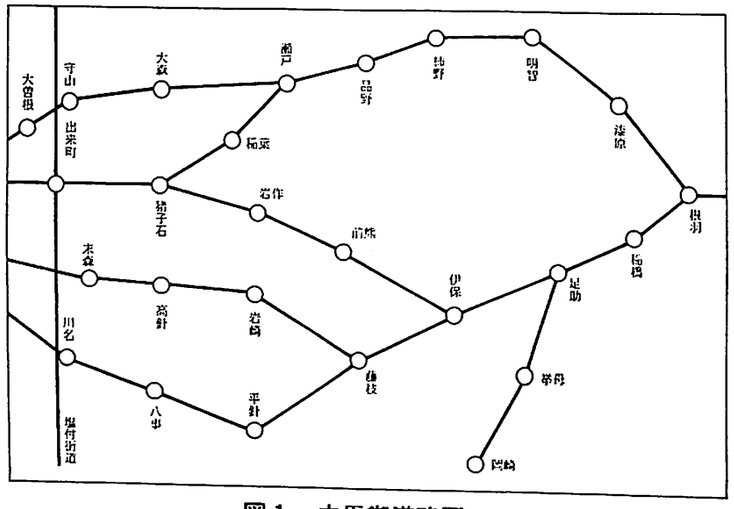


図１　中馬街道略図

岩作の立花を通り、四軒家を過ぎて猪子石へ向かっていました。この道筋は、名古屋城下町への交通路と重なって、現町域では、もっとも人馬の通行が多いメインロードでした。この道は「信州飯田街道」の１つでしたが、東方に向かっては一般に「三州道」とか「伊保道」、時には「足助道」とも呼ばれました。

長久手の脇街道

長久手町内には、上記の東西に伸びるメインロードのほかに、数々の脇道が通じていました。大草から東方へ、八草、山口へ向かう道、北方へは菱野、瀬戸へ行く道がありました。岩作では旧集落を東西に貫く道を軸として、北へは本地、南へは現日進町の北新田、南西方へは長湫に通じていました。また長湫では、北西に向かって下山を過ぎ、森孝新田で名古屋へ向かう道に合流する道筋がもっともよく利用されました。また上社や高針に行く道筋もありました。

このように長久手の旧道は、江戸時代から東西の方向が卓越し、南北の交通路はやや貧弱でした。しかし著名な陶磁器の生産地である瀬戸と、東海道の宿場町鳴海とを結ぶ道筋がこの地域を通っていました。すなわち「瀬戸・鳴海道」です。この道筋は、本地の坂上町から南西に南下して、岩作の隅田で三州道と交差し、長湫の山桶から打越を経て岩崎に達していました。そしてその道筋には、いくつもの道しるべが立っていたのです。

Ⅱ　長久手の道しるべ

道標の区分と形状

長久手町内には、上記の旧道の各所に石造りの道しるべがありました。その数は現在判明しているだけでも２０体に近く、近隣の各市や町に比べても、道標の数が多いのが特徴です。特別展「長久手の旧

道と道しるべ」の開催にあたり、調査した道標は２０基ですが、その内わけはつぎの通りです。

２０基のうち現存しているのは１８基で、記録に残っているが、その行方が不明なのが２体です。また現長久手町内に立地しているのは１７基で、残りの３体は、守山区森孝新田、瀬戸市本地、日進町北新田にあったものです。これらの道標は３点とも「やざこ」とか「をくさ」など、本町内の地名が刻んであるので、調査の中に入れました。

長久手の道標は、その形状によって、道標仏、石柱、自然石の３つに分けることができます。そのうち道標仏が大部分で、行く先を示した文字は、光背に刻まれているものが大部分ですが、台座に彫られているのもあります。自然石や石柱の道標には「南無阿弥陀仏」とか「弘法大師」などと記されたものも見られ、道標仏の変形とも考えられます。道標の多くは現在も花や水が供えられ、中には熱心な信仰の対象になっているものもあります。

道標の製作年代については、「寛政」「天保」「文政」「文久」などと記されたものもありますが、その多くは年代が記してありません。明治から昭和の初期にかけてのものが多いと考えられます。

道標の現況

道しるべは旧道の交差点や分岐点に置かれたものがほとんどです。しかし近代になって道路の拡張や変更、区画整理や交通の障害、最近では盗難の恐れなどの理由もあって、建立当初の位置に現存するものはほとんどありません。製作者の子孫の家の庭や寺院、公民館、弘法堂の敷地に安置されているものがほとんどです。

このたびの特別展では、そのうち移動可能な道標を数点展示することにしましたが、すべての道標をスケッチ、写真等で紹介しました。これらの道標の原所在地、および現在地は、巻末に一覧表にして掲載したので、ご一読ください。

Ⅲ　長久手の旧道を歩く

三州道、八草道、山口道

守山区の四軒家の交差点から南東に１００メートルほど進むと、左手に分かれる道が本地や瀬戸に到る旧道です。分岐点の脇に「陸軍」と彫られた石柱①が残っています。明治３２年（１８９９）に、本地ケ原陸軍演習場が設けられました。石柱はその西端を示す境界杭です。新道を横切って、第２森孝住宅西側の分岐点Ⓐに着きます。文政５年（１８２２）の記録によると、ここに「左いぼ道　右やざこ道」という石標があり、三州道と岩作道の分岐点でした。しかし現在ではその石標の所在は不明です。なおこの地点のすぐ南東②には、古墳に使用されたと思われる黒い石が祀られていました。この石が「黒石」の地名の起源になったのです。Ⓐから東へ直進して、森孝川にかかる小さな橋を渡ると、長久手町域に入ります。その東方、道の南側の角③に、かつて草掛の常夜燈や石造観音がありましたが、今は岩作道

に沿った④に移されています。

長久手高校の南西方、隅田の交差点Ⓑには、「北せと」「南なるみ」という道標仏が置かれていました。四つ辻の北西側には、明治のころ「新兵衛」という旅館がありました。旧道は立石池の堤防の中腹をたどって、立花の四つ辻Ⓒに着きます。ここの道標仏は、台座に「東いぼみち　南やざこみち」と刻まれています。さらに東進して、出田池の堤の上を南へ折れると、池の南側を東に入る道があります。さらに市坂を少々下ったⒹから東に入る道もあります。両者はともに八草道で、前者は丘陵の間を抜けて、２つの岩廻間池の間を通ります。この道筋は道巾も狭く、勾配も急で、車両の通過は不可能です。後者は丘陵のふもとを通っていて、明治以降荷車の通行によく利用されました。Ⓓには「右あきは　あすけ道　左さなげ道」という寛政８年（１７９６）の石柱の道標が立っています。

２つの八草道は、大草の弘法堂⑤の西で再び１つになります。県道を東へ越すと、瀬戸へ向かう菱野道の旧道が北へ分かれます。菱野道が峠を越す手前に石造の弘法像⑥が祀られています。以前ここに良質の清水がわき出ていて、道を行く人々の休息の場所でもあったのです。

八草道は大草の集落の中を進み、やがて三光院の前⑦に出ます。ここには寛政１２年（１８００）建立の常夜燈が立っています。その東方の山口道との分岐点Ⓔには、「右さなげ　左山口道」という道標がありましたが、現在はその所在が不明です。山口道は、今も昔の姿をよくとどめていますが、町境のあたりは樹木が茂って通行不能になっています。

Ⓔから右にとって川を渡ると、八草道は北熊の集落の手前で２つに分かれます。愛知青少年公園の入口に向かうのが上八草道で、道端のやぶかけには「山伏塚」⑧があります。その先の北熊の埋め墓には、貞享３年（１６８６）の名号碑が立っています。愛知青少年公園入口付近の旧道は大きくカーブしていて、「なべづる」と呼ばれていました。

下八草道は北熊の集落の中を屈曲しながら通り抜け、神明社の入口に達します。入口の鳥居⑩は、寛文２年（１６６２）の古いものです。旧道はこの先愛知青少年公園の中を通って八草へ向かっていました。町境の峠のあたりを「コエド」といいました。

Ⓓの地点に戻って、三州道を進むことにしよう。市坂を下って、前熊橋の北詰めに出ます。ここにはⒻとⒼの２つの道標がありました。道標Ⓕは自然石で、「南無阿弥陀仏　右なうらい　なごや道　左やざこ　ミヤ道」と記されています。「なうらい」とは、尾張旭市庄中の直会神社のことで、森孝新田のⒶ地点から北西に向かう坂を「のうらい坂」といいました。前熊橋北詰には「右田籾三十四丁　左八艸一り」という石柱道標Ⓖが立っていました。明治２１年（１８８８）の銘があります。前熊の集落の入口には、「御嶽山大権現参詣道」という石柱⑪が立っています。前熊の集落に入ると、観山寺の入口に石観音⑫があり、その先のⒽの角には「右いハさき　ふくた」と記された自然石の道しるべがありました。さらにⒾの角には「右福田　ちりう　新四国　左伊保　豊川道」という石柱道標が立っていました。福田（三好町）には有名な眼科医がいて、治療に行く人が多かったそうです。⑬の弘法堂の前に、現在Ⓕの道標が置かれています。前熊の集落の中ほどの道沿いには、行者堂や庚申、常夜燈などが祀ってある一角⑭があり、そのすぐ東方に前熊の埋め墓⑮があります。前熊の東部の弘法堂⑯を過ぎて、グリーンロードの陸橋の下をくぐり、一ノ井池の北東のあたりに「右いぼ　左やくさ」と刻まれた自然石の道標Ⓙがありました。しかしこの道標は、香流川の北側の下八草道の分岐点にあったのかも知れません。

岩　作　道

森孝新田の道標のあったⒶの分岐点から右へ向かうのが岩作道です。草掛の常夜燈④の前を過ぎ、岩作の落合で雁又川を渡ると、すぐ北側が豪農のおもかげを残す浅川邸⑰です。岩作道は平和橋北詰で瀬戸・鳴海道と交差しますが、その角の道標仏Ⓚには「右なるみ　左いぼ」と記されています。この石仏は病気平癒の霊験があらたかとて、熱心な信者の参拝が絶えません。

岩作の西島で旧道は新道と分かれて右方に進みます。すると南側に豊龍院の石柱⑱が立っています。境内には常夜燈とか山ノ神の祠などの石造物が祀られています。豊龍院の南東方の畑の中には、ユニークな伝説をもった「八左衛門の墓」⑲があります。長久手小学校の南西の長湫道との交点に、「右なごや道　左なるみ道」という道標仏Ⓛがありました。旧道は長久手小学校の前で南にそれて、旧役場跡⑳の前を通り、県道瀬戸・大府・東海線を横断しますが、その手前の南側に「中脇の観音」㉑がありました。現在は安昌寺の墓地に移っています。

岩作東中の向田橋への道と出合う辻の周辺は、岩作だけでなく、かつての長久手村第１の「繁華街」でした。辻の北側にある弘法堂の向えには常夜燈、その東には「山田屋」という旅館㉒もありました。弘法堂の中にある道標仏Ⓜは、「右なごや　たかはり　左いわさき　ちりう」と刻まれ、この辻の角にあったのです。東方の時計店の横の小道に入ると、「田中の観音」㉓が祀られています。

教圓寺の前を過ぎて、首塚の手前、一六屋の辻に出ます。辻の北西角に「郷社式内　石作神社」という大正１３年（１９２４）の石柱㉔が立っていますが、現在首塚㉕の境内に祀られている道標仏Ⓝは、この辻にありました。像には「右三州道　左品野　水野道」と彫られています。一六屋の屋号は毎月一と六の日に店を開く六斎市がその起源だそうです。

首塚の東、安昌寺参道入口の手前の北側に「末広屋」㉖という旅館がありました。安昌寺の参道には、長久手町でもっとも古く、かつ大きい寛政元年（１７８９）の常夜燈㉗があります。またその東方の高根橋の脇には、岩作の御嶽山の常夜燈などが置かれています。色金山の南麓には、明治２０年（１８７７）の飯島碩太郎の碑、明治３３年（１９００）建立の馬頭観音像、また近年立てられた「いのはなの里謡」を刻した石柱㉘もあります。

かつて色金山の南麓は通行が困難で、岩作道を東へ向かう人たちは、高根橋あたりで香流川を渡り、いのはな堰の南側を通って前熊に達しました。香流川の北側を通る新道が開設されたのは明治になってからです。その結果、立花まわりの三州道に代わり、坂がない岩作道を多くの人々が通るようになりました。また岩作の旧道は、明治以後亜炭の採掘が盛んになったこともあって、数多くの商店ばかりでなく、旅館や銭湯などもあり、役場や郵便局、警察の駐在所など行政の中枢をなす機関も置かれて、長久

手村の中心であったのです。

瀬戸・鳴海道

長久手町を南北に貫くこの旧道の起点は、瀬戸市本地の坂上町にあります。守山区の四軒家から、本地、山口に向かう旧道との接点に、道標仏Ⓞがあり、「右本地原　左やざこ」と刻まれています。旧道は南下して、長久手町界に近い瀬戸市井戸金より南西に向かいます。愛知医科大学の北側を雁又川に沿って進み、長久手高校の南側を通って、隅田の交差点に出ます。ここにⒷの道標仏があったことは、すでに述べました。さらに南へ、岩作の下島の四つ角には、「左やごと　なるみ　右せと　しなの」と記した道標仏Ⓟが立っていました。旧道は平和橋北詰の道標仏Ⓚに至ります。この道標仏は、現在地より５０メートルほど東方にありました。

平和橋を渡って南へ５０メートルほど、長湫の原邸と野田農との字界の三差路に、道標仏Ⓠが置かれていました。像の光背には、「右せと道　左なるみ道」と彫ってあります。この石仏は、今は山桶の地蔵㉙の脇に移されています。その先瀬戸・鳴海道は鴨田川を越えて、五合池の神作の境に沿って丘陵を上ります。現在の通称「ハナミズキ通り」が丘陵の陵線で、長湫ではこのあたりを「坂上」と呼びました。長湫の西部の人々は、この坂上から北西に向かい、下山を経て名古屋に向かいました。途中荒田の「勘解由塚」の前の分岐点に、「右長久手　左岩崎新田道」という天保１３年（１８４２）の道標仏Ⓡがありました。その北西方、下山の分岐点には文久４年（１８６４）の観音像㉚が祀られています。

坂上から南方の打越へ下る坂を「六兵衛坂」㉛と呼びました。坂の下で長湫道の旧道と交差し、道は再び上り坂となって、現在の西小学校の校地を通り抜けます。グリーンロードが通じている徳佐婦の分岐点に、石柱の道標Ⓢが立っていました。「弘法大姉　右ハたかはり　左ハい巴さき」と記され、ここは岩崎道と高針道との追分で、石柱道標にちなんで「立石」と呼ばれました。岩崎道は杁ケ池の西方でさらに２つに分かれ、左へ進む道は尾根筋を通っているので「馬の背道」、右への道は市ケ洞から淑徳大学への谷間を通るので、「岩崎溝道」と呼びました。

長　湫　道

長久手小学校の南西角にあった道標Ⓛを起点として、南へ香流川を渡り、景行天皇社前から、長久手の中心集落を貫いて、名東区の上社へ向かう旧道が長湫道です。この道は、岩作や上社の人たちにとっては「長湫道」ですが、長湫の人々には、西に向かっては「覚王山道」とか「千種道」と呼ばれました。また東方に向かっては「岩作道」とか「瀬戸道」であったのです。この道は大正時代以後交通量が増し近年グリーンロードが開通するまでは、県道名古屋・長久手線として、長久手町内のメインロードでした。

富士浦橋のすぐ南で、南東に分かれる旧道が「岩崎道」です。この道は仏ケ根の古戦場の東側を通り、日進町の北新田に達していました。北新田の三差路には、「右をくさ　せと道　左やざこ　水の道」と

いう道標仏Ⓣが祀られています。

長湫道が香桶川を越える手前の西側に、先達島の行者堂㉜があります。堂内には行者や観音、不動などの石像が安置されています。お富士の切通し㉝から、旧道はバス通りから南にそれて、東浦の公会堂㉞の脇に出て、景行天皇社前に達していました。神社の西方、長久手郵便局の新局舎のある位置に、馬頭観音㉟が祀ってありましたが、今は常照寺の前に移されています。

西長久手のバス停より西方の旧道は、北方に大きく湾曲して坂を上ります。近くの豊善院㊱の境内には、乳地蔵などの石像があります。西ノ根より西方の長湫道は、バス通りより南にそれて町界に至り、上社に向けて坂を下っていました。この旧道は、区画整理事業の進行につれて各所で分断され、消滅しています。

Ⅳ　都市化と旧道の消滅

交通路の変化

明治以降名古屋市街地が拡大し、市内の各所に路面電車が走るようになりました。明治４５年（１９１２）、名古屋駅から広小路を経て覚王山まで直通電車が通るようになると、長久手の人々の生活にも大きな変化がでてきました。従来の猪子石から茶屋ケ坂を経て名古屋へ向かう道筋に代わって、長久手から上社、一社を経て覚王山に出る人々が多くなりました。長久手村内の旧道もしだいに改良されて、乗合バスも通りはじめました。

昭和１２年（１９３７）東山動植物園の開園とともに、市電の路線が延長されると、長久手から東山公園へ向かう人々がますます増えました。昭和４４年（１９６９）地下鉄が藤ケ丘まで延長され、東名高速道路の名古屋インターチェンジの開設、グリーンロードの開通など、長久手町は名古屋市街地と接続するようになりました。

旧道の消滅と保存

名古屋市の人口のドーナツ化とモータリゼーションの普及によって、長久手町の人口と車の通行量は、年ごとに増え続けています。名古屋市に近い長湫を中心に区画整理が進み、広い道路も縦横に開通するようになりました。その結果、生活の必要のための通行路、歩いて通行するための道であった長久手の旧道の多くは寸断されました。残った旧道も、車の通行のための新しい道路に席をゆずって、片隅に追いやられようとしています。

しかし長久手町内には、岩作の旧道など、古いおもかげを残している場所も、まだ多く残っています。町内に数多くある道しるべも含めて、古い旧道の景観の保存のために、今回の特別展が、たとえ少しでもお役に立てばこの上もなく幸いです。

〔小　林　　元〕

スケッチ・拓本

伊藤高義

参考文献

長久手町史　資料編三、四、八

国境いの村　安藤慶一郎・矢守一彦

香流川物語　矢田川物語　小林元

長久手の地名Ⅰ、Ⅱ　小林元

特別展にご協力をいただいた方々

浅井初彦

近藤辰夫

山本金義

山本鈴雄

安昌寺

前熊区

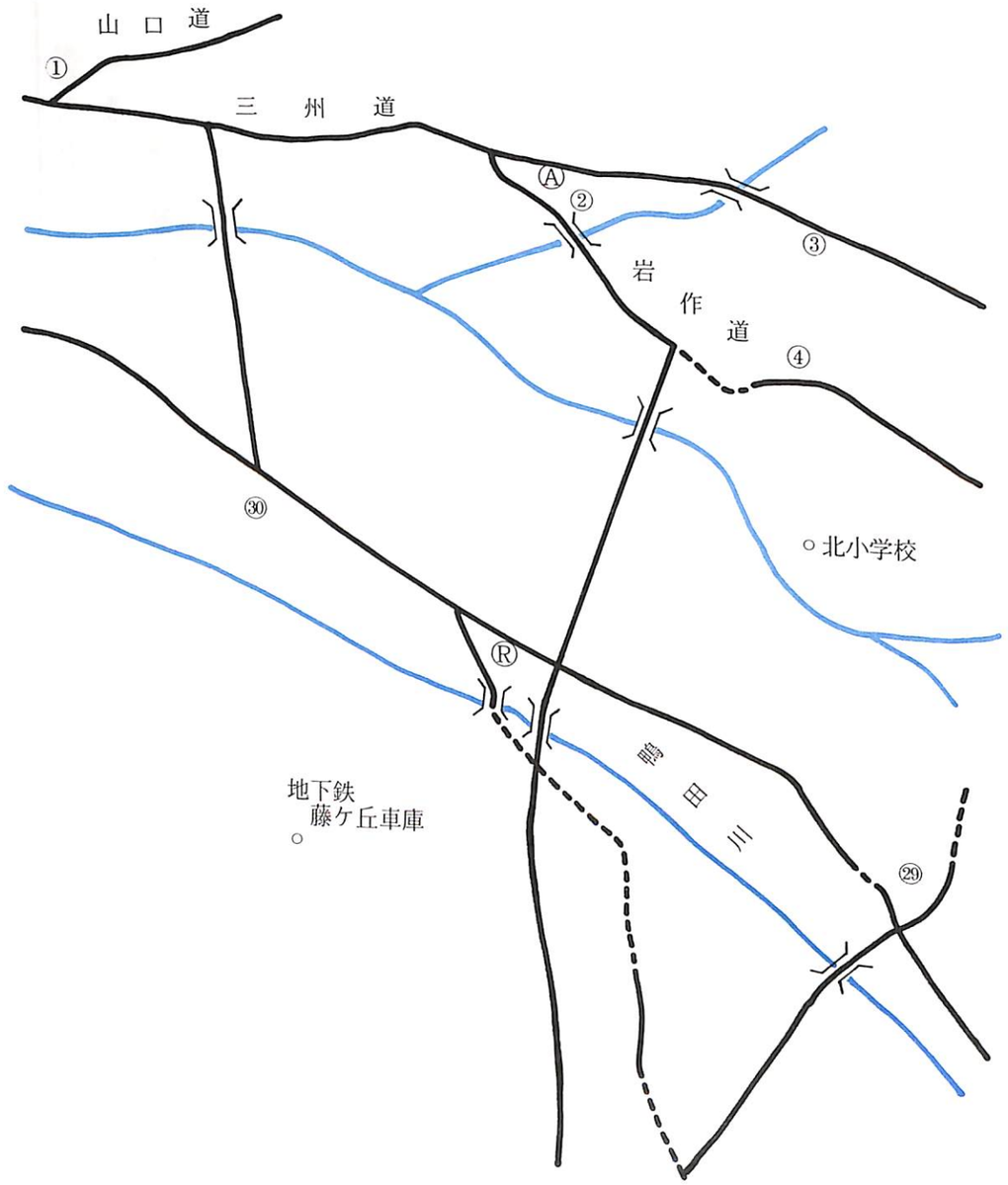
岩作七分会・青年会

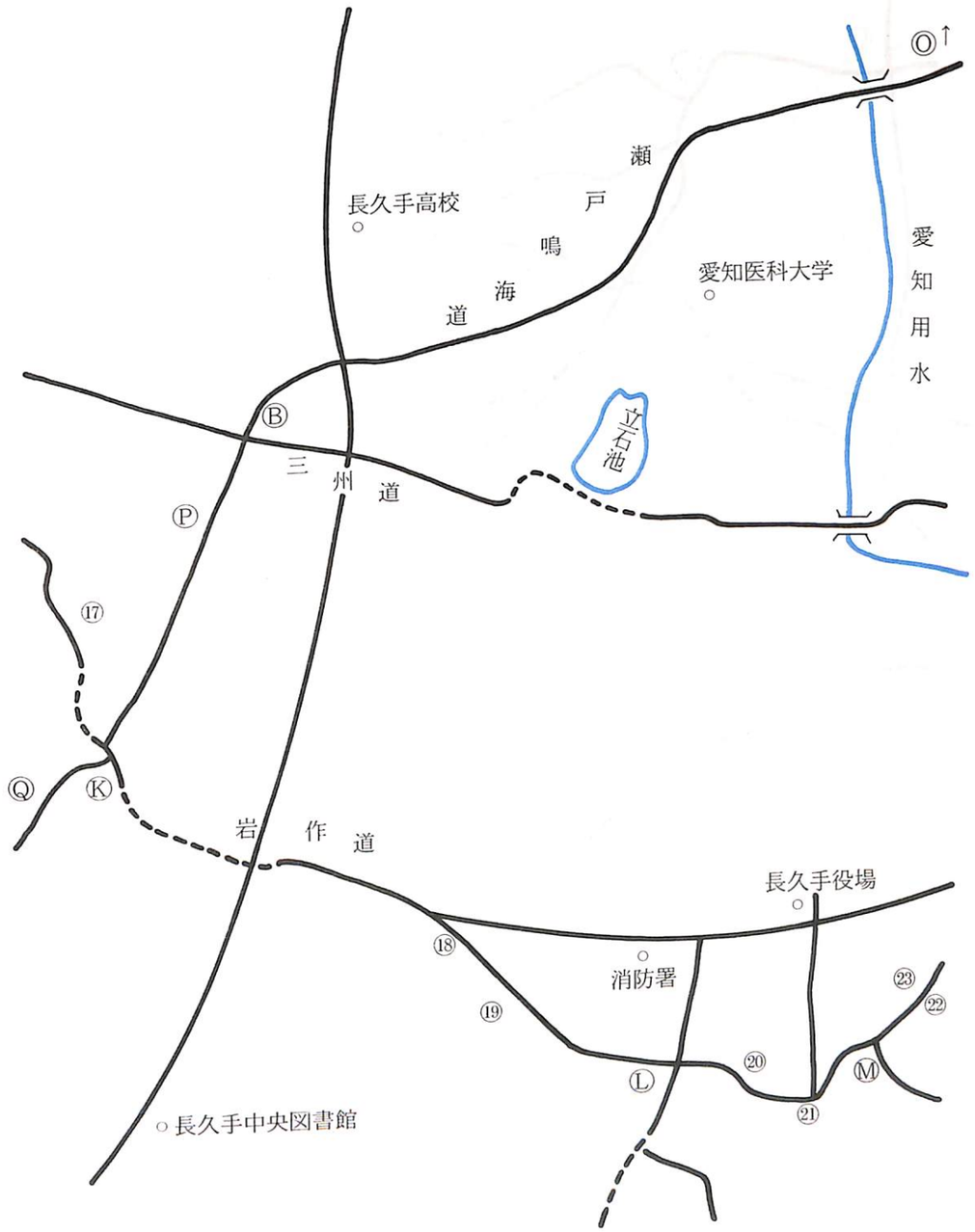
岩作南島辻弘法

監修者

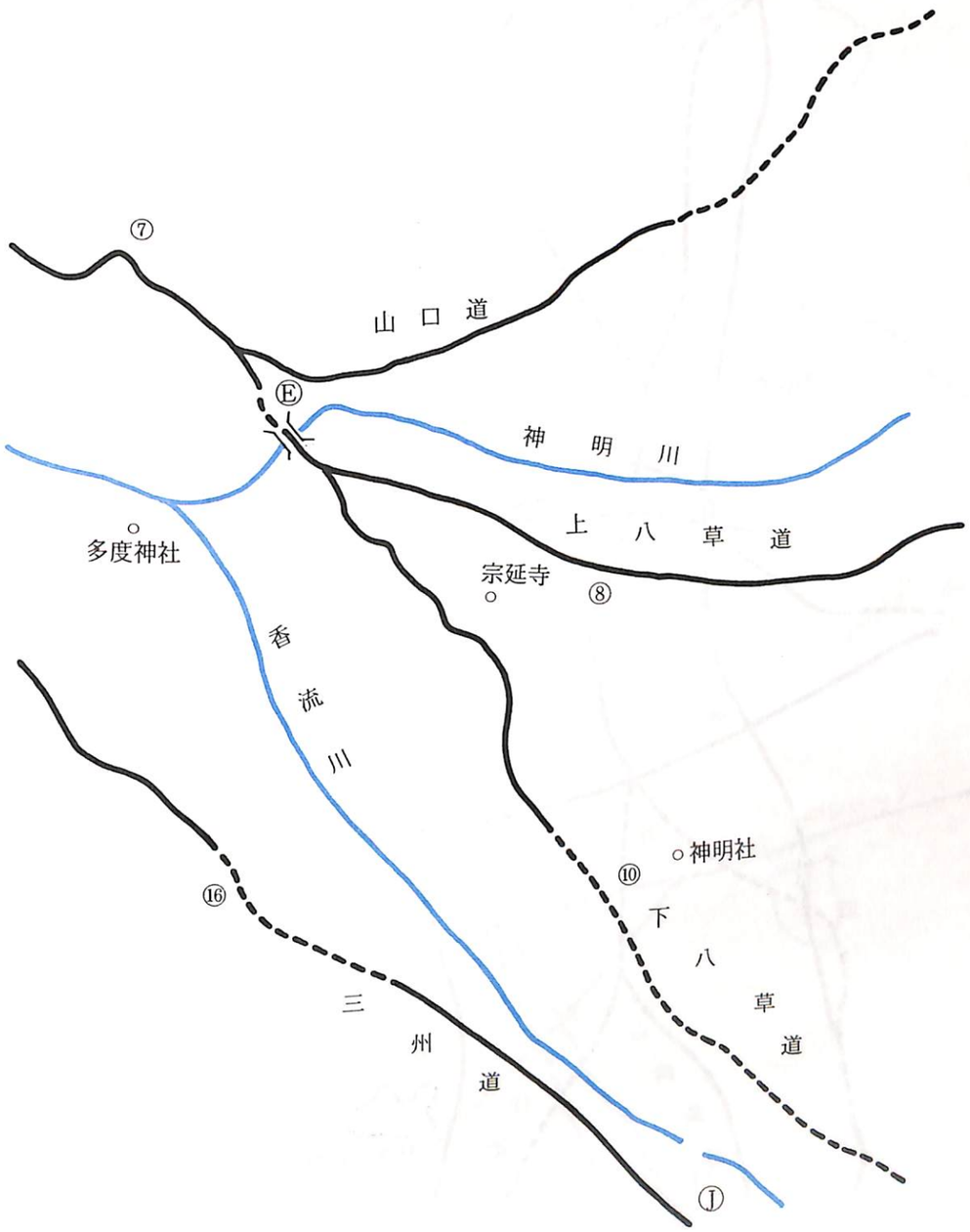
小林元

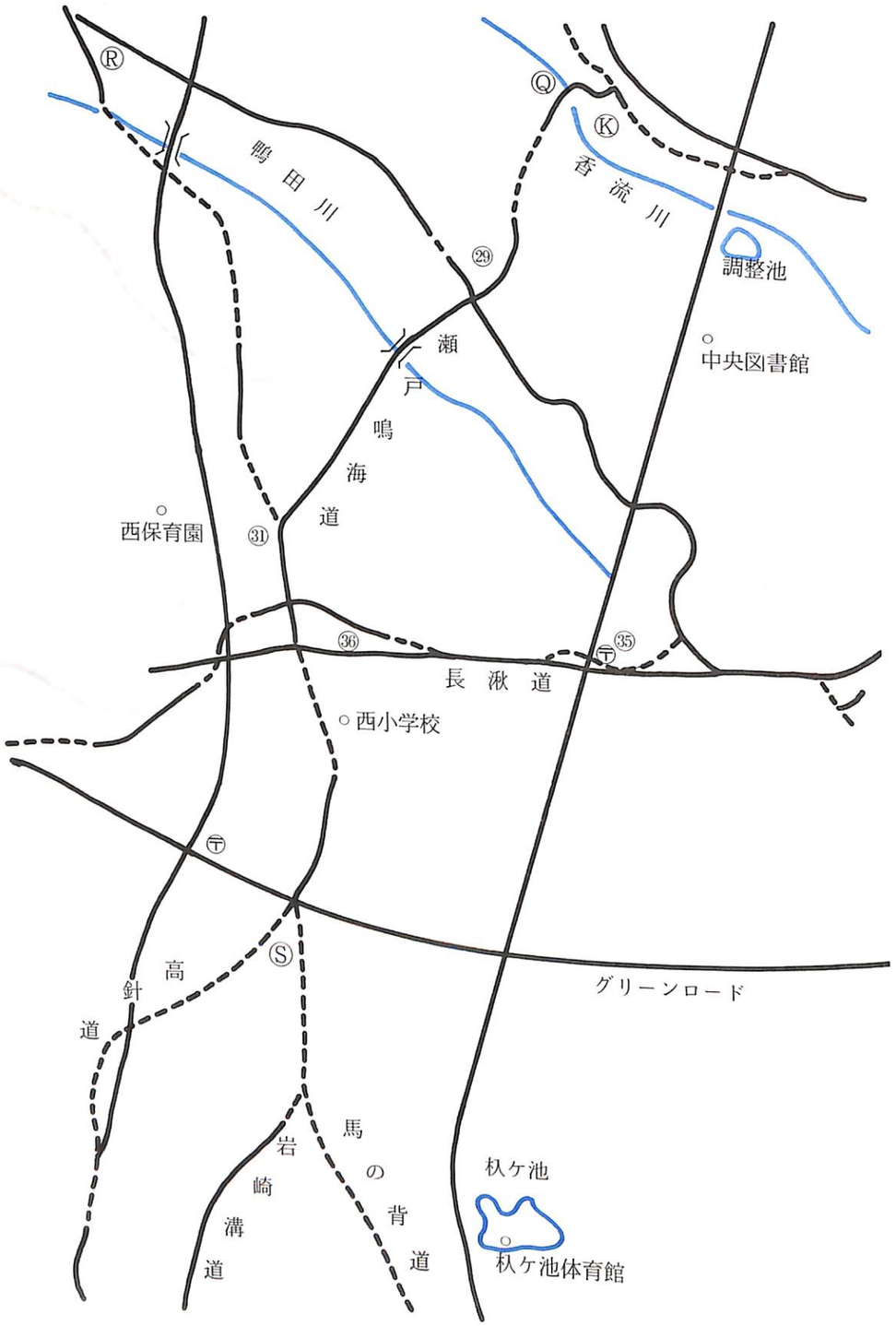
原所在地	現在地	形状	年代		備考
Ⓐ 森孝新田分岐点	所在不明	不明		右やさこ道　左いぼ道	
Ⓑ 岩作隅田交差点	B′ 岩作高山浅井初彦氏宅	道標仏		北せと　南なるみ	
Ⓒ 岩作立花交差点	C′ 安昌寺墓地	道標仏		東いぼみち　南やざこみち	
Ⓓ 大草市坂分岐点	D′ 原所在地南側	石柱	寛政8年（1796）	右あきはあすけ道　左さなけ道	
Ⓔ 大草山口道分岐点	所在不明	不明		右さなげ　左山口道	
Ⓕ 大草真行田	F′ 前熊中島弘法堂前	自然石		右なうらいなごや道　左やさこミや道	
Ⓖ 前熊橋北詰	G′ 長久手小学校内	石柱	明治21年（1888）	右田籾三十四丁　左八艸一リ	
Ⓗ 前熊西脇角	H′ 前熊寺内郷倉	自然石		右いハさきふくた	
Ⓘ 前熊西脇角	I′ 前熊寺内郷倉	石柱		右福田ちりう新四国弘法道　左伊保豊川道	
Ⓙ 前熊一ノ井	J′ 北熊近藤辰夫氏宅	自然石		右いぼ　左やくさ	
Ⓚ 岩作長筬角	K′ 岩作平和橋北	道標仏	安政年間（1854～60）	右なるみ　左いぼ	
Ⓛ 長小南西交差点	L′ 教円寺境内	道標仏	文久4年（1864）	右なこや道　左なるみ道	
Ⓜ 岩作南島角	M′ 岩作東中弘法堂内	道標仏		右なこやたかはり　左いわさきちりう	
Ⓝ 岩作元門角	N′ 岩作首塚前	道標仏		右三州道　左品野水野道	
Ⓞ 瀬戸市本地坂上町	O′ 原所在地	道標仏		右本地原　左やざこ	
Ⓟ 岩作下島交差点	P′ 岩作下島公会堂前	道標仏		右せとしなの　左やごとなるみ	
Ⓠ 長湫原邸角	Q′ 長湫山桶交差点北	道標仏		右せと道　左なるみ道	
Ⓡ 長湫南原山分岐点	R′ 長湫西洞山本金義氏宅	道標仏	天保13年（1842）	右長久手　左岩崎新田道	
Ⓢ 長湫徳佐婦分岐点	S′ 長湫東洞山本鈴雄氏宅	石柱	文政2年（1819）	右ハたかはり　左ハいわさき	
Ⓣ 日進町北新田分岐点	T′ 北新田新道分岐点	道標仏		右をくさせと道　左やざこ水野道	


山口道
①
三州道
Ⓐ
②
③
岩作道
④
㉚
北小学校
Ⓡ
鴨田川
地下鉄
藤ケ丘車庫
㉙


Ⓞ↑
長久手高校
瀬戸鳴海道
愛知医科大学
愛知用水
立石池
Ⓑ
三州道
Ⓟ
⑰
Ⓠ
Ⓚ
岩作道
長久手役場
⑱
消防署
⑲
㉓
㉒
⑳
Ⓛ
Ⓜ
㉑
長久手中央図書館

Ⓞ
Ⓒ
出田池
岩廻間池
⑥
菱野道
Ⓓ
⑤
宮ケ洞池
㉘
Ⓕ
Ⓖ
八草道
安昌寺
Ⓝ
㉕
㉖
㉗
㉔
御嶽神社
⑪
⑫
⑬
Ⓗ
Ⓘ
三州道
堀越川
⑭
⑮
北新田道
Ⓣ


⑦
山口道
Ⓔ
神明川
上八草道
多度神社
宗延寺
⑧
香流川
神明社
⑩
⑯
下八草道
三州道
Ⓙ


鴨田川
香流川
調整池
中央図書館
瀬戸鳴海道
西保育園
長湫道
西小学校
高針道
グリーンロード
岩崎溝道
馬の背道
杁ケ池
杁ケ池体育館

長久手役場
岩作道
長久手中学校
長湫道
岩崎道
郷土資料室
グリーンロード
菅池

平成６年度長久手町郷土資料室特別展
長久手の旧道と道しるべ

平成６年10月発行
編集・発行　長久手町教育委員会
愛知県愛知郡長久手町大字岩作字城の内60－１
☎（０５６１）６３－１１１１